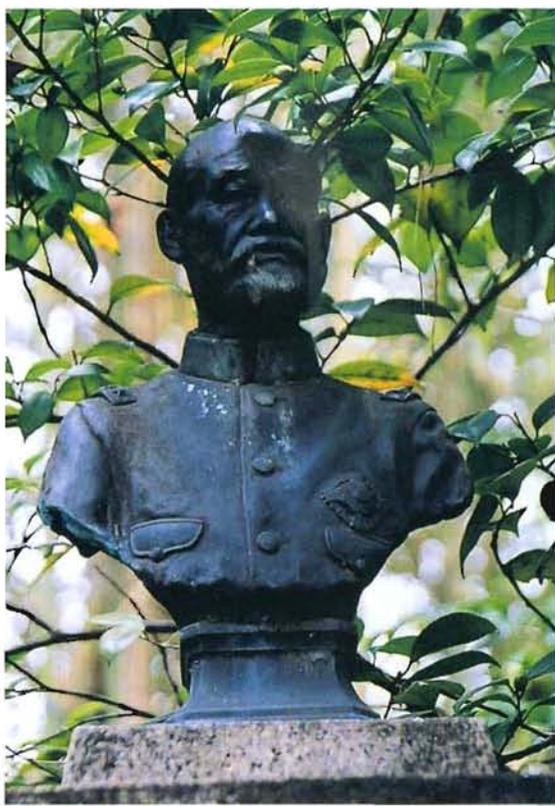


明治の武人、乃木希典大将と伊丹の町の人々

(後編続き)

乃木大将胸像(東り構内)
明治を代表する彫塑家、鑄金家の合作とわかる



乃木大将の胸像 (原好高さん撮影)

さる1月発行の本誌58号「明治の武人、乃木希典大将と伊丹の町の人々」(中編)で、紹介した伊丹市東有岡5の(株)東り敷地内にひっそりと立つ乃木希典の胸像の作者が、荒木村重研究会の森本啓一會長の調査でわかった。この胸像が建立されたのは大正3年。それ以来すでに90年たつてまた、伊丹のかくれた歴史の一端が明らかになった。

この胸像は、約2メートルの台座の上であり、高さ43.5センチ、幅28センチ。小品ながら美しさは際だち、作者の芸術的手腕がしのばれた。そこで森本會長は、作者を知るための手がかりになるものはないか—とこの胸像をくまなく調査しなおした。

「あつた」—森本會長が見つけたのは、胸像の裏の左下隅に残る小さな刻印だった。刻印は縦1.5センチ、横1センチで、梯子を借



渡辺長男・作「乃木希典像」
大正1(1912年)

像も例外ではなかった。そして戦後は、残っていた銅像の多くは「戦争賛美品」として撤去処理されていった。だが、この乃木大将の胸像は生き残っている。その理由は、いまのところわかっていない。

彫塑家、渡辺の先祖は 荒木村重に仕える

それに森本會長を驚かせたのは、

制作者の渡辺長男のルーツであった。系譜では、渡辺の本国は摂津とあり、先祖にあたる渡辺彦左衛門は戦国時代、伊丹・有岡城主の荒木村重に仕えていたのだ。そして村重の叛逆のあとは、村重の従兄弟といわれ、茨木城主でもあった中川瀬兵衛清秀の家臣となった。渡辺家はその後、清秀の弟、秀成に仕え



長男型・雪声鑄の刻印

一方、岡崎は、京都市出身で、安政元年に生まれ、大正10年没。東京・上野公園の西郷隆盛像や、皇居の楠木正成像などを手がけている。渡辺は岡崎の娘と結婚しているの、2人は義父と子の関係でもある。

戦時中の強制供出から まめがれた胸像

さて、東りの乃木大将の胸像だが、非常に強運だった。第2次世界大戦中の昭和17年、金属回収令ができ、校庭にあった二宮金次郎像、さらにはお寺の梵鐘まで強制供出の対象となり、大砲や弾丸となった。各地にあった軍人の銅



渡辺長男



岡崎雪声

りて近づいてみると「長男型、雪声鑄」とあつた。森本會長は、県立美術館の岸野裕人、江上ゆか両学芸員に調査を依頼、最終的には明治彫塑研究会の第一人者である東京・朝倉彫塑館の村山万介さんの鑑定によって、この胸像の作者は、当時の彫塑界の重鎮、渡辺長男と、彫金家の岡崎雪聲で、2人の合作であることがわかった。このうえ、この胸像は、両作家の作品リストには無く、新発見ということになった。

渡辺は明治天皇像、 岡崎は上野の西郷隆盛像など

渡辺は大分県大野郡朝地町の出身で明治7年に生まれ、昭和27年没。著名な作品として乃木大将の全身像、宮中にある明治天皇御尊像や騎馬像、広瀬中佐と杉野兵曹長像、高山彦九郎像などがある。

るようになり、秀成が播州三木から豊後・岡城に移って以降、代々百石前後の禄高で、幕末まで仕えていた。

この岡城は滝廉太郎の名曲「荒城の月」で有名で、城跡にたつ滝の彫像は、彫刻家の朝倉文夫の手によるものだ。ところでこの朝倉は、先の渡辺長男の実弟にあたり、このたびの胸像を鑑定した朝倉彫塑館の主人公でもあるなど、話題は広がりを見せる。

森本會長は、村重の研究に没頭している人。「この子孫がかかわった胸像が今、伊丹・有岡の地に、ひっそりと立つということ、なんと歴史の巡り合わせなのだろうか。どんないきさつで渡辺らが東りの胸像を制作したのかも知りたい」と、その奇遇にびっくりしている。